

平成 26 年度 第 3 回武蔵野市環境市民会議 記録

日時 平成 27 年 3 月 12 日 (木) 18 時 30 分開会 20 時閉会

場所 武蔵野市役所 812 会議室

出席者 委員 11 名、事務局 6 名、コンサルタント 1 名

(委員：田畑委員長、大江副委員長、小玉委員、小林委員、小松委員、田崎委員、西上原委員、白田委員、羽島委員、村越委員、郡委員)

内容 1. 武蔵野市環境基本計画の改定について
2. その他

1. 武蔵野市環境基本計画の改定について

発言者	要旨
事務局	(資料 1「第四期環境基本計画における重点項目とその方向性(事務局案)、資料 2「ワークショップ及び環境市民会議(2/12 開催)における意見等のまとめ」について説明)
委員長	委員の意見を伺いたい。
委員	事務局の説明の補足として。ワークショップと環境市民会議で頂いた意見を環境方針に沿って落としこんでいく議論・作業とともに、環境市民会議としてこれからの 10 年間を見渡して、大事にすべき方向について考えるような大きな議論が必要だと思っている。第三期計画の中では二酸化炭素排出削減と生物多様性の二つが大きな項目であったと思うが、二酸化炭素排出量の推計方法や責務のあり方等わかりにくい面があったため、今回は事務局としては環境情報とその共有、エネルギーのこれから、緑のネットワークの視点を案とした。今後 10 年間の市民、事業者、市の大きな方向性を出していただければと思う。
副委員長	資料 2 の環境方針及び施策の展開と、資料 1 の 3 つに絞った方向性との関係が見えていないので、もう少し説明を求めたい。
事務局	都市計画や緑などそれぞれの個別計画に施策・事業等の積み上げがある。環境基本計画の期間内で環境像を目指すにあたり、計画期間内で実現する、重点的に取り組むことについて方向性を出すことで、個別計画と環境基本計画との接着が成されると考えている。環境市民会議では、そういった方向について、議論いただければと考えている。
委員	環境では暮らしやすさを考えなくてはいけない。資料 2 のごみ減量とか、歩いて楽しいまちづくりというようなものを盛り込んで、市民に直結した文言があるよと思う。
委員長	各部局で環境基本計画に関連する事業をやっており、それらの束ね方として 3 つの方向性とすれば、長期計画の中でのまとめかたに近いのかなと思ったりもする。
委員	環境像「みんなで目指そうエコシティむさしの」の副題部分が、暮らしやすいまちに当てはまると思う。環境像の「エコシティむさしの」を今後も掲げるとすれば、中身として「暮らしやすい」というキーワードを入れる方法もある。3 つの案には、市の環境情報については出し方・受け方が表面的であったり、起こっていることとの連関が薄かったりなどについて市として反省の気持ちが入っている。水素社会については一足飛びに実現するものではないが、自分達がエネルギーを上手く使いながらチャレンジしたいということ。緑・水については、これまでの取組が地域に何をもたらしたのか、地球環境とどのようにつながっているのかを問い直す必要がある。
副委員長	資料 2 の第三期の各セクションから色々なものが上がってきて、それを事務局が環境

	基本計画に整理しなおす。資料1は、第三期でいえば環境像に表されている大きな枠組にあたり、第四期における柱として整理していく。このように理解してよろしいか。
事務局	資料は第三期計画書2頁の、地球温暖化防止と生物多様性の保全の重点項目とし、計画書8頁で（体系的に）施策・事業を表した形である。
委員長	これ以上の議論ではもう出てこない感じなので、次はもう少し具体的な項目・事例が出ると皆さんがわかりやすいだろうから、それをやってから戻ってくると考え方が整理できると思う。本日の残りは、会議の進め方について話してはどうか。
委員	水素社会は予測のできない、市民の方々もよくわからない世界なので、それを考える上で啓発のところが大変であり、そこを掘り下げていくべきと思う。水素だろろうとなんだろろうと生活自体は変わらない、電灯を付けたりテレビを見たりと、根っこでどうつながっているのか、理解を深めていくことをしっかり整理する。エネルギー事業者としては化石燃料で商売をしており、生物多様性とも関係してくる。そういったことを市民に知ってもらうことをクローズアップするやり方もあると考える。5年の期間において、今は市民の意識はこうですがこれ位までもっていきますというようなものがあるとわかりやすい。
委員長	水素社会は最近の論点で、きちんと取り上げている自治体はまだ少ないと思うので、関連付けていくとよい。生態系の問題は、エネルギーや水循環、緑とつながるので、1番上の環境情報のところでそれらの関係をきちんとしながら、2番目3番目につなげていくとよい。
委員	生活に負担をかけずに行動できるようになるのがよい。
委員長	生物、水、エネルギーなどを含んで環境が成立しており、その中で人間を中心に考えたときの計画を考えていくということである。
副委員長	今の話を受けて、2番目のところはエネルギーや資源の地産地消として、水素社会はそのバックグラウンドの一部とするのがよいように思う。3つの項目には、数値でなくとも到達目標的なものがあるとまとまりやすくなると思う。水素社会は車くらいしか具体性がないので厳しい。
委員	事務局では、武蔵野市は消費型の都市で生み出すものがないといった議論が続いて、引き算、保守的になっているということが反省点である。太陽光や温度差の他に、将来の大転換の要素として水素があるかもしれないということを出してみたが、おっしゃるように無理があるとも思う。
委員長	水素社会のわかりやすいキーワードが必要。
委員	地産地消に水素社会も含まれるということである。
委員長	事務局に投げ返すか、委員の皆さんで作るか、いかがか。
委員	先の大江副委員長の意見のように、計画を構造的に見るとどの議論をしているのかが見えづらいのだと思う。資料2で、頭に環境像があり、環境に関する様々な項目が環境方針にぶら下がり、事業計画として作っていく部分がある。環境像の「エコシティむさしの」と6つの方針とをつなぐものが必要で、そのために、もっと力を入れる、深掘りすべき方向をイメージしたものが資料1の3点である。
委員長	事務局には環境像からの構造を次回までに検討いただくことでいかがか。
委員	3番目にある本市らしいということについて、1番目の環境情報をしっかりやるのが本市らしさにつながると思う。守るべきものと創造するものを、2つの方向性で分け

	た方がよい。
副委員長	「みんなで目指そうエコシティむさしの」でいいのかということについて。エコシティの中身を出さないと空論になる。暮らしやすいまちがエコシティの替わりに入ってもよいくらい。エコシティの中身を考えていくと、本市らしさが出てくるかもしれない。
委員	エコシティを三期にわたって掲げてきたが、定義がはっきりしない。再定義するか、それとも言葉を変えか、そのへんの議論があると思う。
委員	武蔵野市には川がないといいながらも、玉川上水、千川上水、仙川、井の頭池からの流れ、下水道があり、小水力発電を検討してみてもどうか。
委員	都留市では、小水力発電でまちおこしをやっている。
委員	玉川上水、千川上水は高低差をできるだけなくすように作られたので、小水力発電は難しいと思う。
委員	大きな方向性はこの3点で問題ないと思うが、市民にわかってもらえるか。資料2も見ながらアクションプランを意識するとわかってくるが。
委員	皆さんの解説をきいてようやくわかった。子どもから大人までといきなり出されても難しい。あと、各主体・各階層というのも、どこ・なにという疑問がわくので、わかるように表示されたい。水素社会は未来のことと思ったので、何年後くらいを見据えているのかとか、基本的なことの説明が欲しい。一般市民には難しい内容で。これだけポンとだされても読みたくないと思う。
委員長	以前は生態系という言葉は通じていなかったが、だんだんと理解されるようになった。今の水素社会などの新しい言葉は、きちっと説明して使うようにしたい。
副委員長	1番目について、「環境情報」「受発信」の部分を、市民目線のわかりやすい言葉になるよう、事務局まかせにしないで考えたい。
委員	1番目「わかりやすい環境情報提供」、2番目「エネルギーの地産地消都市の創造」、3番目「緑と水に配慮したまちづくり」としてはどうか。
副委員長	そのほうがわかりやすい。それぞれ、後段のところを主にしている。 「みんなで目指そうエコシティむさしの」は全体を表すスローガンか。 その下の部分はサブスローガン、タイトルに対するリードのようなものか。
委員長	その通りである。大抵の計画はこのような作り方がされている。
委員	市の計画づくりで、自分達は中学生くらいにわかるようにと意識するが、行政の共通言語を当たり前のように考えるところがあるので、原点に戻るよう反省したい。
委員長	あるところでの小学6年生の発表がすごくて、小学校のときに、田んぼの水路がコンクリートで整備されて、大量のカエルがミイラになっているのを見たことをきっかけにして、カエルの生態を調べて、シュロでカエルが生きられる場所を作ったという説明だった。水素社会についても、そうやってすぐわかっちゃうかもしれない。これも生態系の話で、水とカエルとコンクリートと餌の関係が見えている。市民的発想で環境基本計画や協働プロジェクトが作れるとよいと思う。
委員	第三期までの「みんなで目指そうエコシティむさしの」を第四期でどうするかについては、ここで議論しておいたほうがよい。エコシティの言葉は替えなくても、その意味や中身は第四期ではこうなんだということは、議論すべきである計画期間中に中学生が成人になるということもあって、中学生くらいにわかるというのは重要である。

	世代間で意識を共有できるような風土を醸成するのがエコシティである、とも考えられる。それを踏まえて、世代に応じたアクションプランを展開するなどが考えられる。
委員	行政的にはエコシティを省エネ社会というようにしてしまうが、人として何をしていくのか、何を共有化していくのか、エコが示す社会を書かないと、無機質に見えてくる。キーワードを出していただければ、事務局で文章化できると思う。
委員	武蔵野らしいエコシティは、小学生から高齢者まで意識が高いことというところに持って行けるとよいと思う。
委員長	今の計画までに生きているキーワードを拾い出す、完結して過去のものになったキーワードは拾わないというやり方もある。あるいは、死んだと思ったキーワードがより重要になっていることもあるかもしれない。
委員	事務局にとってキーワードからまとめる作業は、省なんとかではなく、何かの価値感をもたらすことを考える訓練にもなる。
委員	暮らしやすさは人間だけのことではなく、生きものにとっても暮らしやすいと人間にとっても暮らしやすいという考え方もある。
委員	3.11 のことがあってから武蔵野市民も、エネルギーのことを色々考えるようになったことは大きいと思う。産地からの輸送距離を考えるフードマイレージのことは、当時は話しをするとピンときたようだが、今は何それという感じである。考え方が変わってきたことも考慮したい。
副委員長	武蔵野らしさは人である。市民、事業者、行政を含めた人なので、そのつながりを、エネルギーでいえば地産地消に落とし込むように、3者の協働を含めたように出せるとよいと思う。共生、協働、信頼、社会資本、ネットワークなどの言葉が考えられる。
委員長	成熟した武蔵野などもよく使う。
委員	関係性、活動領域、仕組みなど、色々な見方があると思う。物的にみると、武蔵野らしさは少なくなっている。端的に言うのはなかなか難しい。
副委員長	武蔵野市で緑の量を求めても限界がある、難しいので、質になると思う。質を表すには、抽象化するかもしれないが、そのへんを求めることになると思う。
委員	第三期では、安全・安心で健康に暮らせるという部分が暮らしやすさにつながっている。
委員	持続可能性という言葉は古くなったのだろうか。
委員長	持続可能、成熟都市といったあたりは聞き飽きた感じがするかもしれない。10年前の言葉か。
委員	一時期は何でも副題に、持続可能、サステナビリティと付いていた。最近は消滅可能性都市が話題となっている。
委員長	武蔵野市にも都心と同じようなビル、マンションが建って、(らしさは) 難しい。
事務局	本日は多くのヒントを頂いた、事務局のほうでまた検討し、次回はレベルアップしたものを示していく。

2. その他

発言者	要旨
事務局	先週木曜に電子メールで通知した（市民対象の）アンケートについて、頂いた意見も参考に、同案にほぼ近い内容でまとめた。市民 1000 人とワークショップ参加者を対

	<p>象にして、年度末を目処に送付する。分析は来月以降で、結果をまとめて報告する予定である。</p> <p>会議スケジュールについて。次回はおおむね来月上旬で日程を調整する。本日は環境像と重点とする方向性について議論いただいたが、次回は、環境方針以下の要素の部分がある程度示してリアリティのあるものとし、全体的にまた議論いただく予定である。</p> <p>その後は1ヶ月後から少なくとも2回は開催し、5月下旬を目処に中間とりまとめを作成したい。</p>
全員	(特に意見、質問はなし。)